

五 米春禪師、米春けたりや

昔、禪法の第五祖弘忍禪師、識高く學博く遠近來り學ぶ者甚だ多かつた中に、一日、蓬髮垢面身に襤褸を紆ひたる乞食、來つて禪師に參謁するあり。師曰く「何の要ぞや」。「我は廬行者と申す者、唯作佛を求む。如何なる職業にても與へ給へ」と云ふ。禪師「槽廠に著き去れ」米春室へでも行つて居れとの事に、彼は其意を領し禮拜して臺所の方へ行き、日々薪を割つたり米を春いたりして居た。便ち碓坊に入り杵臼の間に服勞し、晝夜息まずに數ヶ月を経たのである。

處へ禪師大衆を一堂に集めて云はるゝは「正法解し難し、徒に吾が言を記し持て己が任と爲すべからず、汝等各自ら意に隨つて一偈を述べよ。若し語意冥符せば則ち衣法皆付せん」何でも己が言葉に付いて廻つて居ては、眞實意は會得出來ぬ、銘々其領得して居る所を述べて見よ。我が意に契ふた者に衣鉢を傳へやうと、五祖が大衆に向つて發表せられた。サア大變。七百有餘の諸弟子、何れも大法の傳持者たらんと欲し、各腦漿をしぼつて、安心會得の領解を示し、我先きにと之を廊壁とて狭きまでに貼り付けた。

身是菩提樹 心如明鏡臺 時々勤拂拭 勿使惹塵埃
みはこれほだいじゆ ころほみやうきやうだいのごとし じぶつとめてふつしきせよ ちんあいをひかさしむるなかれ
とは、上足の高弟神秀の偈頌であつた。人々之を見て賞嘆措く能はず、大法の付囑必ず此人に在りと、羨まぬものもない。米春の廬行者之を傳へ聞き、「可は即ち可なりと雖も了未了矣。惜むべし其意未だ至らず」と。衆信ずる者がない。強て一僧に乞ひ筆を執らしめ、誦出する所は、

菩提元非樹 心豈明鏡臺 本來無一物 何處惹塵埃
ほだいもとぎにあらず ころあにみやうきやうだいならんや ほんらいむいちもつ なんのところにじんあいをひかん
乃ち神秀の頌と並べ掲げられて愕然たらざるはない。

其日、師範弘忍禪師參堂して廊壁の偈頌を點ず。夜半、禪師窺に碓坊に至

つて問ふ。「米春けたりや」。答ふ「米精げ畢んぬ。未だ簸ざるのみ」。禪師
默然、杖を以て臼を打つこと三下。行者亦無言米を簸ること三度。師弟相見
て莞爾。あゝ問ふ者は是れ智徳兼ね備へたる大禪師。答ふ者は是れ無學文盲
の賤業者。極善最上の法は却て極惡最下の者によつて得らる。知るべし。大
道無邊至る所にあり、法門無盡如何なる人も入るを得べし。廬行者慧能は、
米春の賤業の裡にだにも、智あり學ある幾百の子弟が、久しく得る能はざり
し涅槃妙心を、僅一夜の中に容易く之を體得したではないか。

「時々勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむる勿れ」。「本來無一物、何れの處に
か塵埃を惹かん」。彼は行入、此は理入。「米春けたりや」。「米精げ畢んぬ」。
業障の塵埃を拂拭せよ、塵埃拂拭し畢んぬ。米精げらるゝと共に、心も精げ
られた。彼は茲に衣鉢を傳へて、禪門第六祖たるを得たのである。